

E. 自由記述

難聴・言語障害教育の現在・将来等について意見を、見出し語を記してから自由記述で回答するよう求めた。回答は 542 校・園からあり、複数内容の記述も見られた。以下、「*」には見出し語を記載し、「・」には記述内容を記載した。

<人事異動・人事配置・人材育成に関すること> (112 件)

- * 若手の育成について
- * 人材の確保について
- * 指導技術の伝達について
- * 教員の不足について
- * 専門性の維持について
- * 難言経験年数について
- * 通級の加配について
- * 担当者の世代交替について
- ・ 転勤の際はできるだけ言語担当で人事異動させてほしい。
- ・ 異動に伴ってことばの教室の担当を続けられないことがあり、専門性の維持が難しい場合がある。
- ・ 経験年数の少ない担当者が増え、専門性の維持が難しくなっている。
- ・ 小・中兼務でも良いので、1 校につき 2 名（男性と女性）の配置が望ましい。小学校高学年～中学生になると異性の担当者を嫌がる傾向が見られる。
- ・ 特別支援学級担当者の免許保有を徹底し異動も一般教員とは別に行ってほしい。
- ・ 自立活動や言語聴覚士の免許を持ち、希望する者を優先的に担当にするなどの体制がとれないか。
- ・ 専門性だけがあっても言語聴覚士とは違うので学級担任の経験や見極めができないと学校にある通級の意味がないと考える。
- ・ 担当する前に内地留学があったが、現在はその制度がなくなり、新任者は、大変苦勞している。

<難聴に関連すること> (111 件)

- * 難聴理解について
- * 難聴学級担当者について
- * 教員の専門性について
- * 指導方法について
- * 補聴器について
- * 人工内耳について

- * 情報保障について
 - * 字幕について
 - * 音声言語の文字化について
 - * 手話について
 - * 進路・就職について
 - * 設備について
 - * バリアフリーについて
 - * 聴覚特別支援学校から転入する子の増加について
 - * 難保ネットワーク作りについて
 - * 合理的配慮について
 - * ICT活用について
 - * 障害者手帳について
 - * 聾学校との連携について
- ・ 道徳や学級指導、職員研修の機会をとらえて難聴理解を深めていくよう努力しなくてはいけない。
 - ・ 軽度難聴の学級が設置されて1人の先生が配置されるような状況になったり、人工内耳の子どもに、不慣れな担任が配属されたりしている。
 - ・ 同じ聴覚障害の仲間がいる喜び。
 - ・ FMマイクの使用を拒否する高校が複数あり、生徒への進路指導をどのようにしていけばよいのか。
 - ・ 中学校へ進学するにあたり、机・いすにテニスボールをつけてほしいと1年以上前から話しているが、なかなか動いてもらえないのが現状である。
 - ・ 指導者の手話、口話を活用する上での研修（専門性）が必要になると思われる。
 - ・ 聴覚支援学校と連携できるとよい。

<学校、教室経営に関連すること> (85 件)

- * 言語障害教育について
- * 通級指導教室の役割について
- * 言語通級教室引き継ぎについて
- * 支援体制について
- * 指導時間について
- * 連携について
- * 難言、自閉・情緒・LD・ADHD教育部会の協働について
- * 教室の啓発について
- * 事務・業務について
- * 児童数について

* 専門性の伝達について

* 通級担当者と学級担任の温度差について

* 難言の将来について

- ・コーディネーターを中心としたチームの一員となり、サポートする役割を担う。
- ・どの子にとっても居心地のよい、居場所でありたいと思う。
- ・最近、発達障害の教室がととも増えてきている。そのうちことばの教室も対象児の区別なく「通級指導教室」として個別指導をする場になってしまうのではないかと危惧している。
- ・多数の学校との関係、他市町村との関係で事務手続きが多い。
- ・通級という特性を校内で理解してもらうのが難しい。この教育の必要性について啓発していくことが大事である。
- ・「ことばの教室に行きたい」「先生にこんなことを話したい」と思えるような関係を作っていきたい。
- ・長く難言の経験を積まれた先生方が退職や転任などで指導の場を離れてしまい、引き継ぎが難しい。
- ・途切れのない支援においては、医療、福祉との連携が欠かせない。
- ・幼児の言語指導も受け入れる、体制を作ってほしい。

<研修に関連すること> (85 件)

* 担当者の質の向上について

* 指導力向上について

* 専門研修について

* 専門性の維持向上について

* 在籍学級担任の理解について

* 新担当者の研修について

* 内留制度の復活について

- ・人材育成のための研修が必要である。
- ・研修機会の充実。採用に当たって大学連携を通して専門性の高い教員の確保してほしい。
- ・発達障害通級との連携、共同研修を行う。
- ・半年から 1 年間、難言教育にかかわる研修を複数回義務づけることが必要。
- ・聾学校等である研修会にもぜひ行政側からも参加し、障害への理解をしてほしい。
- ・言語の研修は、通常の学級の担任も参加して、ことばの教室をより理解してもらえらると思う。
- ・関係機関や言語聴覚士との情報交換や連携、研修を指導にいかしたい。
- ・言語担当の希望者は内留など出来るとよい。

- ・難言担当となった初任者が、「明日すぐ使える指導内容」の研修を受けられる機会があるといい。
- ・将来どんな職業選択があるか、どういった方向が望めるのか、研修を深めたい。

<指導・専門性に関連すること> (66 件)

- * 指導の専門性について
- * 指導内容について
- * エビデンスのある指導方法について
- * 障害の理解について
- * 自己肯定感の向上、安定について
- * 指導力向上について
- * 資料教具機具等の充実について
- * 終了時期について
- * 早期支援について
- * 保護者支援について
- ・言語だけでなく発達全般に関する相談にも応じているので、見識が求められている。
- ・保護者に対しては、障害の受け入れ、交流学級等の先生に対しては、障害の理解が必要である。
- ・最近、良い教材を開発する人々が増えているので、もっと広めたい。
- ・構音を改善する指導の継承が担当者交代の方が早くて進まない。
- ・吃音の本質と吃音児の悩みを理解することが最も大事だと思う。
- ・構音指導を基礎として、障害児のコミュニケーション能力やソーシャルスキルの向上、読み書きが苦手な子への支援に対応できる教室になっていくこと。
- ・言葉に課題がある点で、LDや情緒も重複して課題を持つ子供が多いので、指導内容の幅を広げるなど、多様な障害に対応していく指導を考えていく必要がある。
- ・「自分が好き」な子。自分を信じ、自信が持てる子になってほしいので、一人一人のよさ、特性を生かした指導を心がけたい。
- ・終了の設定や決定が難しい。特に言語発達の遅れで通級している児童は、学年が上がるにつれ、次々と課題が出てくるため、何をもって終了とするかが難しい。
- ・言語聴覚士と連携しながら指導していけるのが望ましい。
- ・専門性は、目の前の子のニーズに応じて研修しながら進化した結果である。
- ・聾学校の教師を一定期間小・中学校へ派遣した方がいい。
- ・ことばでの「やりとりをしていく力」をつけていくこと「楽しんだ経験」をしたことはその後の人生を歩んでいくとき、とても豊かになっていくと思う。
- ・学校、学級の中でのその子の暮らし、居場所はもとより学習場面でのその子がどのように活躍できるのか、イメージした上で課題を明らかにし、自立支援へとつなげるこ

とが大切。

- ・ベテラン担当者による定期的に担当者に対して巡回指導などがあるとよいと思う。

<発達障害等多様な対象児に関連すること> (64 件)

- * 障害の多様化について
 - * 場面緘黙児について
 - * ディスレクシアについて
 - * ことばの教室の対象について
 - * 支援・指導領域の拡大傾向について
 - * 情緒通級との連携について
 - * 卒業後について
- ・発達障害の児童の指導が多くなるので発達障害の研修がどんどん多くなってしまふ。
 - ・発達障害についての専門的な研修を受けていないので、不安な面がある。
 - ・側音化構音や口蓋化構音、吃音の子どもたちの中には、発達障害を合わせもつ子どもが高い割合であり、これからの難言担当には、LD、ADHD、ASDの指導に関する知識や技能は必須である。
 - ・児童の困り感に対応するため、ことばの教室で、発達障害が疑われる児童を受け入れている。
 - ・言語障害の子どもが減り、発達障害の子どもが増えているため、言語障害に限定してしまうと、教室が運営できなくなる。
 - ・経験の少ない担当が多くなってきいたため、発達障害のある児童の指導が非常に難しいと思う。
 - ・情緒通級が設置されていないため、言語障害通級指導教室が担っている。

<学級・教室設置に関連すること> (61 件)

- * 通級の柔軟性について
 - * 学校格差について
- ・各学校に通級指導教室があるとよい。
 - ・通常の学級で全ての児童が教育を受けられる時間と障害に応じた通級指導の場や時間が存在する学校が理想的だと思う。
 - ・言語障害通級であるかほとんど発達障害の子どもでしめている。どの学校もニーズが増えているので各校に発達障害のある子ども達の生きる場として、通級指導教室等を設置すべきだと思っている。
 - ・通常の学級の中に言語に困難さをもってはいるが通級できない現状がある子も多い。
 - ・発達障害の教室は設置されつつあるが、難言の教室は新設されていない。
 - ・センター的機能が十分に果たせるような、教室配置の工夫がされるとよい。

- ・通級指導教室のある学校は、手厚く対応してあげられるが、ない学校は通級が難しい等、格差を感じる。
- ・言語と発達障害を分けて設置するのがよい。校内で発達障害が増え続けている。

<担当者に関連すること> (39 件)

- * 担当の専門性について
 - * 子どもの全体像のとらえ方について
 - * 心理面のサポートについて
 - * 役割について
- ・大ベテランと初心者に近い指導者の割合が大きく、中堅の担当者が少なすぎて、今後が心配です。
 - ・講師でなく身分のはっきりしている正規の教員を担当にあててほしい。
 - ・教育学部での難言教育や発達障害に関する教育をすることで、教員としての基礎的な知識を身につけていくことも今後大切だと思う。
 - ・一般の教諭とは異なる知識・技術を必要として、子どもとかかわるスパンも長くなることもあるので、転勤を 10～20 年位の基準年数でもよいと感じる。
 - ・「子どもの幸せ」、「在籍学級へ戻った時の嬉しそうな姿について」、など思いを共有できる同僚の存在の大きさを感じます。
 - ・忙しさが増し、経験年数もつみ上がらないため、担当者の相互のつながりが薄くなってきている。
 - ・個に応じた指導が基本となるため職員数を増やしたい。
 - ・私は言語聴覚士ではなくて教育者という自負をもちながら指導に当たっている。

<巡回指導に関連すること> (32 件)

- * 指導形態について
 - * 教員の所属について
- ・送迎の難しさから必要だと分かっているけども通級できない子どもがいる。
 - ・希望すれば月に数回、他校の子と小集団指導を受けられるなど、「通うことのよさ」も残していけるといい。
 - ・言語指導の場合、教材・教具、施設設備の充実、親の送迎、小集団指導や教室行事の実施等を通して、課題改善に向けて前向きに取り組ませることが重要となるが巡回にすると困難になってしまう。
 - ・仕事を持つ保護者が増えて、通級に保護者が同行することが難しいケースがある。
 - ・難言学級も次第に巡回制になるのではないかと話題になっている。
 - ・このままの通級でよい。
 - ・山間地域など、通いたくても、通えない子がいる。定期的な巡回指導ができれば、そ

んな子どもが救われる。

- ・教育委員会所属とし、全て巡回指導とすることが望ましい。必要あれば、兼務発令も活用する。
- ・言語聴覚士、作業療法士の資格のある方が巡回で相談にのって下さると、指導が有効なものになると思う。

<幼児教室に関連すること> (23 件)

* 幼児担当の身分の保障について

- ・構音障害は、早期の指導が有効である。幼児担当が対応し、早期に改善できることが望ましい。
- ・幼児教室の経験年数が少ない担当者も多い。担当者同士で話したり、相談したりする場や時間を確保したり、研修の機会を増やしたりすることが大切だと考えている。

<中学通級に関連すること> (20 件)

* 支援のつなぎについて

- ・思春期以降の支援が必要と思われるケースも、中学、高校にことばの教室がなく受け入れている医療機関も少ない。小学校を卒業すると特別支援学級転籍か、まったくの支援なしかの 2 択しかなく、本人や保護者の安心を支える次の支援の形が作られていくとよい。
- ・個に合った支援をつないでいく意味で、中学校に通級指導教室があったら救われる生徒も増える。
- ・学校の言語通級指導教室がなく、小学校卒業後の子ども達の行き場がない。
- ・小学校 6 年生まで通級指導を受けていた言語発達の遅れの疑いのある子どもの中学校での受け入れの場がないなど、中学校での LD 等教室の設置が早急に必要だと感じる。
- ・幼・小・中と支援がつながり、支援環境が整いつつある中で、高校ではどのような支援が必要であり可能であるのか、中学校の担当者として高校と連携して考えていきたい。

<言語聴覚士に関連すること> (10 件)

* 資格について

* 障害の判断について

- ・言語聴覚士を学校現場で活用できるようにして、あくまでも言語に関する指導を行う時に来校してもらおう。
- ・言語聴覚士を配置してもらい、「ことばの教室」は言語聴覚士に任せ、「通級」は、種別の壁をなくす。

<インクルーシブ教育システム構築に関すること> (8件)

- * 通級指導教室のあり方について
- * 他の指導の場との役割分担について
 - ・特別支援教室、特別支援学級・言語障害通級・情緒通級、いろいろな支援の場がある。支援の在り方をどう促えるかが課題である。
 - ・インクルーシブ教育システムの中でどう位置づけられるかという「守りのことばの教室」から、福祉、医療、日本語教育ともコラボレートしていく「攻めのことばの教室」へと踏み出したい。

<その他の記述>

- * 児童の育て方と発達について
- * 通級の立場について
- * 免許制について
- * 親の会について
- * 私立学校児童の通級について
- * 保護者の通級拒否について
- * 支援のシステムについて
- * スクリーニングについて
- * 外部専門家の活用について
- * 人間関係力の育成について
 - ・口や舌を使う体験不足が見られることから家庭教育の充実が必要。
 - ・管理職の特別支援教育に対する理解。
 - ・小中学校で問題のなかった児童・生徒でも必要を感じた時に気軽に相談できる場が充実してほしい。
 - ・将来保護者となる生徒へ構音・吃音の障害についての理解教育を行う。
 - ・特別支援教育を担う通級指導が認知されていない。
 - ・難言については免許なしで行っているの、専門性を高めるのであれば、免許制にしたらどうか。
 - ・難聴・言語障害教育について総合的にまとめてあるサイトがあるとうれしい。
 - ・幼児期から中学・高校まで、一貫性のある子どもとの関わりは必要だと思う。
 - ・学齢では支援学級と言語通級の二重サービスは使えないため、発音の残る子がいる。必要な子は言語通級にも通えるようにしたい。
 - ・在住の児童が私立の学級に通学（在籍）している場合の通級について。
 - ・特別支援学級に進んだ子どもの構音指導をどこで誰がするか。
 - ・高校や大学での支援・配慮の引き継ぎや連携のあり方を模索中であり、知りたい。
 - ・将来、社会に出ることを考慮し良好な人間関係を築くことができるように指導したい。

<まとめ>

担当者の「人材育成」と「適切な配置」に関する記述が多く見られた。「担当者の高齢化」や「経験年数が3年未満の担当者」の増加に伴い、「人材育成」と「適切な教員の配置」は喫緊の課題となっている。「人材育成」については、専門性の維持・向上を図るために、計画的な研修の機会や大学等への長期研修の機会を設けたり、他の教室と連携して指導の参観をしたりして、長期的な計画のもと人材育成が求められている。また、「適切な配置」については、人事異動の際に専門性がある教員が適切に配置されなかったり、講師で対応していたりすることで専門性の維持・向上が難しくなっていると考えられる。そこで、人事権をもつ教育委員会や管理職に難聴・言語障害教育の専門の必要性について理解を促し、連携して適切な人的配置を行う必要がある。

また、発達障害を合わせ有する子どもの増加に伴い、難言教育担当者が、発達障害について正しく理解するために研修に行き、支援・指導方法について悩んでいる。また、自閉症・情緒障害特別支援学級等、他の障害種の学級や教室との連携等、難聴・言語障害学級・教室の役割や意義について見直していく必要性を記述した回答も見られた。

「巡回による指導」に関する記述も見られた。巡回による指導の取組には地域差があった。巡回制への移行に不安を訴える回答もある一方、遠方の児童生徒や保護者の負担軽減や、児童生徒のニーズに応えることができると巡回による指導を希望する記述も見られた。

指導方法についての記述では、難聴に関連する記述が最も多かった。教科学習や自己意識の形成、支援機器の活用方法、補聴器、人工内耳や情報保障について、聾学校との連携や難聴のある児童生徒同士の集団活動、進路や就労に向けて全般的に記述がされていた。また、難聴のある児童生徒が入学することで「難聴学級」が設置され、経験が浅い担当者が配属されることもあるという記述があった。難聴にかかわる専門性を必要とすることからこそ、計画的な人的配置が望まれている。